

## 児童健全育成賞（数納賞）佳作

# 「地域が子育てを支える」で社会を変える

山口県岩国市 NPO法人とりで 金本秀韓

### 1 児童養護施設の子もたちとの出会い

私は、高校卒業をするまでサッカーをこよなく愛するどこにでもいる少年だった。その頃はサッカーを中心に生活がまわっており、その他の趣味と言っても友だちとくだらない馬鹿話や日々の何気ない会話をするだけで満足していた。そんなわけで大した夢や目標もない生活を送っていた。そして、私は高校卒業を控えた高校3年生の夏、進路を嫌でも考えざるを得ない時期になった。特にやりたいこともない私は親のありがたい勧めにより大学進学をする権利を得る事ができた。しかし、具体的には「実家（山口県山口市）から通える国公立大学ならね。」という条件付きの権利であり、当時の実家から通える大学と言えば国立大学と公立大学の2か所だった。それでも大学の学費を出してもらえただけでありがたいと思ったし、高校卒業後すぐに就職して働くイメージもなかったので素直にその2校を軸に進路を考えた。受験する学校、学部を選ぶ決め手がないか、それまでの自分の生活を振り返って見ると、子どもとかかわることが好きだったな、という僅かな記憶に思い至った。私の父親は5人兄弟で、それぞれの兄弟に子どもが3人以上いたため、盆や年末年始はその子どもたちが大集合、みんなでどんちゃん騒ぎをしたものだが年上の従妹がいれば年下の従妹もいて私はもっぱら年下の従妹の面倒を見る

ことが多かった。その時のかすかなやりがい？楽しさ？をあてに、子どもと関わる仕事ならできるかもな、と考えた。教育学部のある国立大学か社会福祉学部のある公立大学として進路を考えた際に教員よりは保育士のように生活を支える立場を取りやすい職を目指したいと思い、公立大学への進学を考えるようになった。そして、これもありがたいことにその公立大学は県内の推薦入学枠を多く設けており、私もその推薦入試を受けることができ、運よく合格できた。サッカーを続けてきたことや、その中でキャプテンを任せてもらえたこと、勉強もほどほどにしていたことを評価されたのだと思う。目標はないなりに、そこそこ努力してきたことが報われた形になった。

2002年4月、晴れて大学入学をした私は望んで入学したにもかかわらずイマイチ勉強には身が入らなかった。社会福祉学を学んでも、実際に経験してみないとどうも興味が沸かない性質で、それが学習意欲の上からなさに繋がった要因だと思う。その調子で2年間があつという間に過ぎ2004年、大学3年生となった。そこで、社会福祉士の受験資格を得るために社会福祉施設に実習に行くこととなったのだが、私は偶然にも山口県内にある児童養護施設（以下、施設）で実習をすることとなった。そもそも、施設がどういった場所かわからない状態で14日間の実習に行くことになったので、はじめはどんな子

どもたちが生活しているのか不安でいっぱいだった。しかし、実習で出会った子どもたちの明るさがそんな不安を一気に吹き飛ばしてくれた。施設にいる子どもたちは主に虐待が理由で親元を離れて施設で生活しているのだが、そんな雰囲気は微塵も感じさせず笑顔で元気よく生活していた。当たり前前に学校へ通い帰宅してからは施設の子どもたちがみんなで施設の裏庭で遊ぶ、そんな調子で私はその中にありがたく迎え入れてもらい毎日サッカーばかりして過ごした記憶しかない。いつの間にか、これが仕事になるなら、なんて幸せなことだろうと思うようになっていた。そして、名残惜しくも施設実習は終わり、いよいよ2005年4月、私は大学4年生となった。その頃は明確に施設に就職したいと思っていたが、当時施設での就職の応募は年度末にならないと出ないと言われており、6月ころから周りの同級生の就職が決まっていく様子を見て私は焦っていた。そんな中、10月ごろになんと実習でお世話になった施設が求人募集を出しているのを発見した。すかさず応募し、就職試験に参加したものの、応募人数に対して倍率が7倍程度の参加人数であった（現在、施設は人材不足で、このような状況は今では考えられない）。しかし、細かいことを考えても仕方がないので施設で実習したという経験だけを唯一の武器としてアピールした結果、幸いにも採用していただき、晴れて2006年4月から施設で児童指導員として働けることとなった。

しかし、安心したのもつかの間、施設の職員になると実習では見えなかった多くの事に気づかされることになった。そのすべてを語ることはできないが、まず一番の驚きは施設がとても荒れていたことだった。小学生は集団で施設職員に反発、暴言を吐きまくり、中学生は不登校の子どもが複数名、高校生は門限なんて存在しないかのように平気で深夜に帰宅する。注意しようものなら器物破損、時には職員への暴力もあった。1年目からこのような状況を目の当たりにし、驚きと動揺を隠せなかったが、不思議と疲労と同じくらいのやる気もみなぎったのを

覚えている。おそらく、この施設を変えられるのは自分しかない、という若者特有の勘違いがその根っこにあったのだろう。そして大した知識も経験もない私にできるのは、子どもたちととことん関わり、向き合うことだった。まずは子どもたちとの遊びに真剣になった。施設の裏庭でサッカーしたり、一緒に公園に行って遊んだりするだけでなく、事務に交渉して予算を確保し外食やボーリングなどにも連れて行ったりした。そんななかで見てきたのは、小学生はもちろん、中学生も荒れているように見えるが心の底では職員との関わりが希薄で寂しさを感じているのでは、ということだった。その証拠に、遊ぶ機会や時間が長くなればなるほど、子どもたちは私の話を聞いてくれるようになり荒れた態度をとる回数が減っていった。私の子どもたちとの関わり方のベースとなる「遊んで関係を作る」が出来上がったのは、この時期だったように思われる。施設のような場では指導的な関係よりも遊びなどを通して時間を共有し対等な関係性を築くほうが重要なのだと体験的に理解できた。

そんな私も施設に入職して4年目を迎えたころ、施設の課題を知ることとなった。当時、中学生男子のAは、施設ではそこそこ落ち着いていたが学校生活が荒れていた。教員への暴言や授業抜け出し、自転車で校内に乗り込む等、手が付けられない状態になっていた。そうなると学校から施設へ苦情が入り、施設としてもこのまま置いていると学校へ迷惑をかけるという結論となり、Aは違う施設へ異動させられることになった。虐待等が理由で家庭に居られなくなり安全な場所を求めて施設に来たはずの子どもたちが、その施設に適応できないと、結果として施設すらも追われてしまうという現実を知り、私は一施設職員としては、とても整理できそうにない課題を痛感することになった。その後も同じように問題を起こして施設を追われる子どもたちを見送るたびになんとも言えない無力感を感じるようになりこのまま施設で働いているだけで良いのか自問自答することが増

えた。

## 2 地域の子どもたちとの出会い

このような葛藤を抱えながら2014年4月より、私は施設を運営している社会福祉法人の他部署となる児童家庭支援センター（以下、センター）へ異動することとなった。葛藤を解消できないまま異動となり正直戸惑いもあったが、センターでは施設に入所している子どもたちではなく、地域の子育て世帯の相談支援を行なうことが主たる業務となるため、視野を広げるには必要な事だと整理し、異動して1か月後にはセンターでの業務を学ぶことに必死になっていた。ここでは、地域の子どもたちの実態を知ることができた。

それまで、私は施設に来ている子どもたちに対し、「運が悪いな。」とか「ここに来なくてもいい方法はなかったのかな。」と感ずることが多かった。施設に来た子どもたちは親元を離れて集団生活（私が勤務していた施設は大舎制だった）を余儀なくされ、細かいルールを守りながら子ども同士の関係にも気を遣って生活する姿を見ていたからだ。しかし、センターでの相談業務を通して地域の子どもたちの生活に触れる中で、その感想は「施設に入れて良かったのかもしれない。」というものに変わっていった。「子どもとどうかかわって良いかわからない。」と親子関係に行き詰った家庭、毎月の給食費の未払いが続いている家庭、毎日3度の食事の準備もままならない家庭、物やゴミであふれた家庭、このような状況に向き合っているうちに、「施設での生活＝恵まれていない」という認識が徐々に変わっていったのだ。なぜなら、施設では毎日3食食事が用意され、学校関係諸費の支払いが滞ることはなく、施設内も職員が毎日交代で掃除をしているため清潔な環境が保たれている。複雑な状況に置かれた子どもたちが安心して生きていくためには、家庭にこだわらず施設を適切に活用することも必要なのだと考えるようになり、時には「この子たちは施設に来た方がいいんじゃないか。」とさえ思うことも

あった。とは言っても、子どもたちにとってはやはり親は大切で離れたい存在であることも事実なので、施設での生活が良いのか、親子の生活が良いのか、地域の子どもたちと関わるなかで、大いに考えさせられた。その結果、私は「家庭と施設、どちらかだけではなく両方必要だが、家庭での生活をまず支援することが重要、それでも間に合わなければいったん施設で保護して親子関係を見直す。」という段階的な支援を実践する必要があるという結論にたどり着いた。そのためにも、できるだけ早く子育て世帯と関わりを持ち、手厚く支援する仕組みが必要だと考えたが、当時のセンターでは個別の相談が中心で、アウトリーチ（相談を受けるのを待つのではなく出向いて支援する）にあたる活動は行っていなかった。センターで出会った保護者の多くは自ら相談に来るということは滅多になかった。学校関係者や近所の方など周りに促されてやっと相談に来たり、センターから訪問したりすることが多く、そもそも困っていても相談に来る力が乏しいのだ。日々の子育てに疲れ、相談に行く余裕がなく、そもそも他人に相談するということが思いつかないのだろう。そうであれば、アウトリーチ活動をどれだけ充実させられるかが重要になってくるが、当時の私に法人を変えていくだけの力もなく、時間もかかると感じた。そこで私は無謀にも10年間お世話になった社会福祉法人を退職し、幅広いアウトリーチ活動を行うため2016年3月にNPO法人を設立した。

## 3 NPO法人とりでののはじまりと地域支援

2016年3月に設立されたNPO法人とりで（以下、とりで）は、「地域が子育てを支える」という理念のもと、①虐待などの理由で親元で生活できない子どもたちを預かり親代わりをする自立援助ホームと、②地域の子育て世帯を支えるための無料の食事支援（以下、こども食堂）と学習支援に取り組み始めた。自立援助ホームについては、前職で施設の児童指導員として勤

務した経験が活かせるためさほど心配はなかったが、地域の子育て世帯向けのこども食堂や学習支援（以下、地域支援）はこれまでに組み込んだ経験がなかったため、本やインターネットで得た知識をもとに開始することとなり多少の不安を抱えてのスタートとなった。

活動拠点となる地域を決めるために最も優先した条件は、自立援助ホームのニーズがある場所、というものだ。当時、山口県内だけでなく、隣の広島県内においても女子が入居できる自立援助ホームはまったくなかった。そのため、高齢で学籍がなくても入居できる自立援助ホームはニーズがあると考え、山口県と広島県の県境にある山口県岩国市に法人を設立することにした。ただ、私自身はこの岩国市に何のつながりもなく知った方は数名のみ、ほぼゼロから繋がりを作っていかなければならなかった。また「岩国市」と一口に言っても、特に市内のどの地域に経済的に困っている子育て世帯が多いのかなどの情報が不足しており、市のどこで地域支援を始めるかについても考える必要があった。そこで、自立援助ホームで勤務をしてもらえることになった職員Bさんに相談することにした。Bさんは岩国市が地元、ほぼそれまでの生活を岩国市で過ごしてきたこともあり地元の事情に詳しかった。Bさんによると、自宅のある中学校区には市営住宅、県営住宅が集まっている地域があり、その近くで活動を行えば経済的に課題のある家庭も参加しやすいのではないか、ということだった。こうして法人の拠点となる自立援助ホームの場所と地域支援の活動地域が決まった。次に考えたのは、活動を行っていく人員体制だ。これについては、はじめから私が活動の取りまとめ役をし、こども食堂の調理については自立援助ホームの職員が行うという形をイメージしていた。自立援助ホームの職員が地域に出て子どもたちと関わることで、法人と地域のつながりを作るといった狙いがあったからだ。以上のような経緯により自立援助ホームを開設した3か月後の2016年6月にはこども食堂を開始した。はじめはBさんの知り合いの家庭の子

どもが数名来るだけの場所であったが、徐々に子どもたち同士の口コミで利用者が広がり、多い時には40名来る日もあった。子どもだけで来やすいように予約は不要、登録もなし、利用料無料とし参加するためのハードルを下げたことが、参加人数増加につながったのだろう。はじめは無料であることに対する地域の方の不審な目もあったが、毎月2回、土曜日の昼食提供として、繰り返し利用してもらうちに法人に対する信頼も感じてもらえるようになり、不審な声も少なくなっていった。さらに、「一食食べさせてもらうだけでも助かる。」「子どもを数時間見てもらえて助かる。」など保護者のリアルな声を聞くことができ、活動に対する手ごたえを感じる事ができた。

また、学習支援についてもこども食堂と同時に開始した。活動の時間帯が平日の19時から21時ということ子どもたちだけでは参加が難しいかもしれないという不安もあったが、始めてみると親が子どもを送迎してくださり子どもだけで活動に参加したり、他の家庭の子どもも乗り合わせで参加させてくれたり、と工夫してくれる家庭も出始めた。地域支援の活動は子どもと直接かかわることで、親の子育て負担の軽減という支援となるだけではなく、地域の家庭同士がつながるきっかけ作りにもなるのだと、活動を始める前には気づいていなかった地域支援の在り方や効果について学ぶ事ができた。

このように、アウトリーチ活動を主とした地域支援は予想以上に順調な滑り出しを見せた一方で、当然ながら課題に気づくこともあった。その中で大きな課題は、本当に困っている家庭にどうすればつながることができるのか、ということである。実際、「行政や学校には頼りたくない。」という親や「他人に頼ったら申し訳ない。自分の子なので。」と子どもたちを活動に参加させたがらない親もいた。逆に余裕がある家庭だからこそ、他人に頼ることができ、困っていることを気軽に共有できるのかもしれないと感じた。澤山（2019）<sup>(1)</sup>が『『ダイエットしたいけど、食べたい』『勉強したいけど、面倒

くさい』といった葛藤は、われわれも日々体験しているありふれたものである。ただ第三者からそれを指摘されると抵抗したくなるのである。」と述べているように、人は分かっているにもかかわらず変化を恐れ他者に決定されることに抵抗することがあるのだ。そこで、こういった親に支援を受け入れてもらう戦略が必要になる。

#### 4 地域支援における戦略

本当は地域支援の活動に来た方がよさそうだが、そこまで拒まなくてもよいのに、と感じる子育て家庭の親、「困っていきそうな親」に時々出会うことがあった。この課題に対して私が考えた方法は、一つ一つ断る理由をなくしていく、というシンプルなものだ。まずは予約不要、登録なし、利用料無料の仕掛けもその一つなのだが、それでも利用してもらえない時には必ず「会場に来るのが子どもだけで不安なら送迎しますよ。」「保護者の方も一緒に来られて大丈夫ですよ。」「同じ学校の同級生も来ていますよ。」といった声掛けをした。送迎をしてくれるなら子どもも親も行き帰りの負担や心配もなくなるし、保護者も来て良いなら活動の実態を知ってもらい不安を払拭できる。また、子どもにとって知っている友だちがいるということは安心感につながる。シンプルだが、粘り強く声を掛けるこの方法で次第に「困っていきそうな親」が活動に来てくれるようになっていった。当然のことだが「困っていきそうな親」は行政から見ても「困っていきそうな親」、もっと言えば困っていても支援を受けたがらない人であるため、「困っていきそうな親」に適切な支援を届けるには、行政の力が必要になる。とりでは、この地道な地域支援を通して「困っていきそうな親」と行政のつなぎ役としても機能できるようになった。行政から連絡があっても電話に出なかったり面談を断ったりしていた家庭でも、とりでの活動には子どもが参加し、行き帰りの送迎をしていけば、次第に「困っていきそうな親」ととりでに信頼関係が芽生え、「子どもの発達のことで悩んでいて。」と言われた際に、とりでから「岩国市の家庭児

童相談室に相談してみたらどうですか?」「学校のスクールカウンセラーであれば学校の中で相談できますよ。」と情報提供ができ、信頼関係ができていくとりのからの勧めであれば相談をし、支援を受け入れるということが何度もあった。この地域支援の活動を通して、「困っていきそうな親」にとって子どもたちが楽しく活動することで、子育て負担軽減の場としての機能と、相談し支援を受け入れる準備をしてもらう機能、二つの機能があることに気づいた。そう考えてみると、とりでの強みは「相談から始まらない関係づくり」だと言える。荒井(2019)<sup>(2)</sup>は、「支援は無条件に『正しい』とされやすく、支援を受ける側の『尊厳』を軽視しがちです。全国子ども福祉センターでは、設立当初から子ども・若者の尊厳や自己決定の機会を奪わないために、かれら自身も活動に参加できるような仕組みを整えてきましたが、実際に活動が続ける中で、それがどのような支援よりも重要なことだと確信するに至りました。」と述べているが、とりでの「相談から始まらない関係づくり」もこの考えに近いだろう。こうして、地域支援の根幹となる二つの機能に基づき子育てを支援するというとりでの戦略が固まっていたのである。

#### 5 自立援助ホームで出会った子どもたち

私は、経験の乏しい地域支援の活動に比べ自立援助ホームの運営については前職の経験を活かせるためさほど不安を感じてはいなかった。しかし、入居してくる子どもたちはそれまで私が出会ったことのない女子ばかりであった。親から性的虐待を受けた女子、非行を繰り返し親に家庭での養育はできないと自立援助ホームに連れてこられた女子、反社会的組織とのつながりを断つために入居となった女子、当然入居後もさまざまな表現で私たち職員(以下、大人)を悩ませてくれた。就労先の飲食店や買い物先の店舗、問題を起こすたびに世話になる警察署、迷惑をかけるさまざまな方に謝罪し、子ど

もたちには説諭、この繰り返しであった。自立援助ホーム特有の「働いて家賃を納める」という約束を守れない子どもは珍しくなく、開設して1年間は子どもたちに振り回されっぱなしの時間が過ぎていった。就労して自立するまでには膨大な時間がかかることやそもそも入居の主な原因としてある親からの虐待で受けた傷をどう癒していけばよいのか、多くのことに頭を悩ませた。そんななかで次第に、就労を続けられるように励ます姿勢も大切だが、それよりも日々の生活の中で子どもたちと大人のかかわりが何より重要だと捉えるようになった。生活の中での何気ない会話であったり、食事を共にしたり、つらくて泣いているときは共に悲しんだりすることが欠かせないのだ。この日々の暮らしのなかでの子どもたちと大人の一貫したかかわりが、それまでの不安定で一貫していないような虐待環境で生活してきた子どもたちにとっては何よりも治療的なのである。

ある事例についてここで紹介する（一部、内容を加工）。両親のネグレクトによりろくに中学校も通わず、高校にも進学できなかった女子Cは、17歳の頃から両親の指示によりビジネスホテルで一人暮らしを開始していた。日々の生活費は毎週決まった曜日に振り込まれる両親からの仕送りを自分でATMから引き出すことで確保し、コンビニエンスストアなどで食事を購入していた。やがて両親と音信不通となりCと両親をつないでいるのは定期的に振り込まれる生活費のみとなった。Cの様子を気にかけていた祖母は、両親ともCとも連絡が取れなくなった時初めてこの状態を知り、捜索願を出した。結果、コンビニエンスストアでお金をおろしているところを地元警察署の署員に保護され児童相談所で一時保護された。その後、とりでが運営する自立援助ホームに入居となった。この時Cは17歳だがいわゆる居所不明児のため、中学校を卒業していないことになっていた。そこで、まずは自立援助ホーム近くの中学校に通わせ、中学校卒業を目指した。入居してからのCは口数が少なく気力の乏しい女子だった。しかし、

入居までの様子を聞くと饒舌に語るCを見て、「随分あっけらかんとつらかったであろう過去を語るのだな。」と不思議に思った。同時に、理路整然とした説明からは知能の高さを感じた。その時点で、「環境次第ではこの子は伸びる。」と確信した。中学校を無事に卒業したCは毎日通学できる定時制高校へ通うこととなった。

定時制高校入学後、Cは次第に自立援助ホームでもよく話すようになり笑顔も見られるようになった。アルバイトも入学時から始め、接客業や清掃業を精力的にこなし自立援助ホームの家賃支払いが滞ることもなかった。しかし、時には他の入居者とのいざこざに巻き込まれ、「もうこんなところ出たい。いたくない。」と落ち込み涙することもあった。そういった喜怒哀楽を繰り返し経験しながら高校卒業後の進路を考える時期になった。Cは、「これまでいろいろと我慢しながらやってきた。これからは自分が本当にしたいことをしたい。」と意思表示し、県外の短期大学に進学し、英語を学びたいという想いを話してくれた。そうと決まると、進学先の候補の検討や給付型奨学金の申請など高校と連携して準備が始まった。卒業前の10月ごろに進学を決めたので慌ただしい準備となったが、Cは見事短期大学に合格、給付型奨学金受給も決まり希望通りの進路が決まった。このCの喜ばしい進学決定は、見方を変えればそれまで3年以上を過ごした自立援助ホームの退居が決まったということでもあるため、大人はみな寂しさを感じずにはいられなかった。しかし、入居直後のCとはまるで別人のように明るくなり、しっかりと意思表示できるまでに成長した姿を見てうれしさや地道なケアに対する大きな手ごたえを感じられたのは言うまでもない。

子どもたちがそれまでの生活で受けてきた虐待などによるさまざまな影響を短期間でケアすることは難しいが、大人が環境を整え、一貫した態度で生活を見守っていれば子どもたちは本来持っている力を十分に発揮するようになり、大きな成長を遂げるのである。これは、自立援助ホームで生活する子どもたちだけでなく、地

域の子どもたちにも同じことが言える。だからこそ、とりでは、地域の子どもたちにとっての環境である家庭、子育てを支えていくことを活動の理念として掲げているのである。

## 6 NPO法人とりでの目指す未来

とりでは、「地域が子育てを支える」を理念に活動をしてきて今年で6年目になる。地域の子どもたちを支え、そうすることで家庭を支え、結果的に親子の関係性が良好となるよう働きかけてきた。地道に活動をしていく中で、とりでとのかかわりを経て「子どもとの接し方を考えるようになりました。最近は少し、注意する回数を減らしています。」「時々、とりでさんで子どもを見てもらえるので、家に帰っても余裕を持って子どもと接することができます。」「食事の支援をしてもらえて本当に助かります。」といった多くの親の声を聞くと、活動に対する確かな手ごたえを感じられる。ただし、これらはあくまでも個別の対応に関する手応えであって、地域の子育てに対する社会の目を変えるまでにはいたっていない。たとえば、とりでがかかわることができた親子の状況が好転したとしても、かかわるまでに至らなかった家庭については、難しい状況が続くことになる。この直接的なかかわりの有無を越えて、子育てに対する社会の目を変えていくことこそが、とりでが本当に目指すものだ。子育ては親子で担うことが中心で、できるかぎり親子で完結すべきだという考えを変えていきたいのだ。そのために、現在とりでは地域支援活動の報告だけでなく、とりでに賛同・支援していただいている地元企業との様々な形の連携等についてもメディアやSNS等複数の媒体を通じて情報発信し、広く社会全体から共感を得るための戦略的な広報活動にも力を入れて取り組んでいる。「子育ては地域で支えるものだ。」という文化を根付かせることにまで影響できていないが、地域を巻き込みながらの地道な活動と適切な情報発信を同時に行って、いずれはこのレベルまで到達するのが目標である。

また、家庭に対する働きかけのみではなく関係機関との円滑な連携も必須となる。現在、とりでは2市の要保護児童対策地域協議会の構成員となっておりこの2市の各ケースに関する連携が可能で、特に難しいケースに関しては、個別ケース検討会議を通じて役割分担の確認と支援状況の共有など具体的な連携ができています。今後は、市だけではなく児童相談所や他のNPO法人、社会福祉協議会などとも連携して子育て家庭に対して協働した支援を行い、より多くの家庭とかがわって、子育てを地域全体で支えられるようにしたい。

さらに、とりでの内部にも課題は残っている。とりでの事業は「自立援助ホーム」に加え、「ファミリーホーム」や地域支援、障害児を支える放課後等デイサービス、児童養護施設等を退所したアフターケア事業などさまざまな種類があり、これらを有機的に組み合わせることで複雑な状況下にある子どもや家庭のニーズに対応できるようになっているのが強みである。しかし、拠点多いがゆえに各拠点間の職員のスムーズな意思統一は簡単ではなく、いざ連携を試みても、連携自体に合意が得られなければ感情的な摩擦を抱えた状態での支援となり職員の意欲を削いでしまうこととなる。このような課題を克服するために、内部研修の充実や、法人のこれまでの経緯の振り返りを行い、拠点間連携の必要性やその成果を職員自身が実感できる仕掛けが必要である。とりで自身が地域の一部であり、地域の子育てを率先して支えていく存在であるからこそ互いに支えあうのだということを職員全体で共有できれば、「子育ては親だけがするもの」という固定観念を取り払い「地域で子育てを支える」社会にさらに一步近づけるだろう。今後もとりで一丸となって目の前の子どもたちやその家庭に向き合い、積極的に活動を発信していきたい。

## 参考文献

- 1 松本俊彦『「助けて」が言えない』日本評論社、2019年

- 2 喜多一憲（監）堀場純矢（編）『子ども家庭福祉』みらい、2020年
- 3 橋本好市・原田句哉（編）『演習・保育と社会的養護実践-社会的養護Ⅱ-』みらい、2019年
- 4 荒井和樹『子ども・若者が創るアウトリーチ』アイエス・エヌ、2019年

## 引用文献

- (1) 松本俊彦『「助けて」が言えない』  
日本評論社、20P、2019年
- (2) 荒井和樹『子ども・若者が創るアウトリーチ』  
アイエス・エヌ、85P、2019年